

トランジションという観点から見たフリーター

本 田 由 紀

概 要

本稿は、日本労働研究機構が1999年に実施したフリーター97名に対するヒアリング調査データを用い、フリーター析出の契機を<組織から組織への移行の失敗>という観点から整理し直し、各契機ごとに重要な諸要因を抽出した。また、それぞれの契機に応じて、フリーターになった後の進路展望の変化についても検討を加えた。その結果、フリーター析出の契機は①選抜における非選抜、②移行先への不適応、③移行の長期化、④移行行動の欠如の4つに分けられ、それぞれ教育システム内部で生じた場合と、教育システムと職業システムとの間で生じた場合から成る。そしてこれらの契機において移行を阻んでいる要因としては、①家計要因、②意識要因、③進路指導要因、④教育内容要因、⑤正規労働市場要因、⑥非正規労働市場要因、⑦特殊労働市場要因が抽出された。フリーター問題は、これらの諸要因がもたらす教育から職業への移行のアポリア化の表れとして把握される。

キーワード

フリーター析出契機、移行阻害要因、進路意識、労働市場、移行のアポリア化

1. 本章の課題

1990年代半ば以降、教育システムから職業システムへのトランジションのあり方は、大きな変貌を遂げている。その現象形態の1つが、高校－企業間の「実績関係」の後退であり、それは組織と組織の関係性の次元である（本田（沖津）1998）。そしてもう1つの次元は、組織と組織の間を移動する個人の問題であり、そこにおいて顕在化している社会現象・社会問題が、いわゆる「フリーター」である。その数は90年代に顕著な増加を遂げ、2001年時点で200万人を超えているとされる（小杉編2002, 27頁）。

むろん1990年代に若年労働市場の状況が厳しくなったのは日本だけではない。多くの

先進諸国における調査や研究では、学校教育から職業への「移行」が以前にも増して不安定で不透明な、リスクをはらんだ課題となりつつあることが指摘されている。たとえば、1998年のOECDデータでは、欧米先進15カ国における16～29歳の離学後（卒業と中退の双方を含む）1年目の若者の中で、男女ともほぼ半数が期限付き雇用の仕事に就いており、また男性の4人に1人、女性の3人に1人はパートタイムの仕事に就いている（OECD 1998, 97頁）。男性のパートタイム率は、オランダでは69%、デンマークでは46%、イギリスでは45%に及んでいる（同）。日本についてはこれと正確に比較可能な数値はないが、日本労働研究機構（2002）によるフリーター率の推計（1997年時点で男性6.4%、女性16.3%、ただしここでは30代前半も対象に含めている）を参照するならば、日本の状況は先進諸国の中ではまだしも楽観できるもののように見える。しかし、そうした楽観論は一部割り引く必要がある。なぜなら、上記の諸外国の男性パートタイム労働者のうち、オランダでは91%、デンマークでは82%、イギリスの88%が、職業訓練の一環として、あえてパートタイムの仕事に就いているからである（前掲書）。

日本のフリーターは、このように職業訓練を主目的とした欧米の若年非正規就業者とは大きく異なる性質をもっている。正社員でも学生でも主婦でもなく、かつ特に職業訓練を目的とすることもなく、アルバイトを転々とするこの社会集団は、理解を超えた新奇な存在として、90年代後半以降、社会的な注目や批判の的となってきた。教育システムと職業システムとのあわいに漂流する彼らの実像を捉えようとする研究がこれまでも試みられてきているが、その多くは、若者の職業意識の曖昧さや、景気低迷による労働力需要の低調さなど、「わかりやすい」要因にこの現象を還元して理解する傾向があった。しかしフリーターという存在は、教育から職業へのトランジションをめぐる、より根底的な変化の表れとして理解されるべきである。それはどのような変化なのか。教育システムと職業システムとの間のギャップは、具体的にはどのような形を取って現出しているのか。教育システムから職業システムへのトランジションにおいて、従来の何が機能しなくなっており、どのような新しい認識や施策が求められているのか。先入観を交えずフリーターの実態に目を凝らすことにより、その向こうにトランジションの現在と未来の像を透視することが、本稿の課題である。

2. フリーター析出要因に関するこれまでの研究

若者がなぜ、どのようにフリーターないし無業者になっているのかについては、これまで様々な実証研究が行なわれ、要因の分類やそれに基づく類型化が試みられてきた。

その中で特に注目されてきたのは、高校生が卒業後にフリーターという進路を選択する理由である（刈谷他 1997, 耳塚他 2000, 耳塚 2001, 下村 2002, 中島 2002, 堀 2002）。確かに日本労働研究機構（2001）の都内若者調査でも、現在フリーターである者の最終学歴は 47% と約半数までが高卒であり、フリーターを考える上で高卒時の進路選択が重要であることは疑い得ない。しかし、同調査サンプルの高卒者の中で、高校卒業直後の時点からフリーターないし無業であった者は、さらに約半数である。すなわち、フリーターサンプル全体の中で高卒時点からフリーターないし無業であった者の比率は半数の半数、つまり 4 分の 1 にすぎない。それゆえ、フリーターの全貌を明らかにするという目的にとって、高卒時にフリーターになる者の重要性を強調しすぎてはミスリーディングである。

それはともあれ、こうした高卒時のフリーター・無業選択者が生まれる背景についてはどのようなことが明らかにされてきたのか。粒来（1997）は、1996 年 1 月～2 月に都内の高校 3 年生に対して行なった調査の結果に基づき、高卒無業者の析出メカニズムとして「進路選択の遅延」を指摘し、さらにその中でタイプ分けとして、メリトクラティックな原理が機能している「将来無展望」型と、非メリトクラティックな原理が機能している「進路非収斂」型の 2 つを指摘している。

また日本労働研究機構が 2000 年に高校 3 年生を対象として実施した調査では、卒業を控えた 2 月時点で高校卒業後にフリーターになることを考えている者に対して「フリーターになることを考えたのはなぜですか。」とたずね、16 項目の選択肢を掲げている（日本労働研究機構 2000 b）。その結果に基づき、「就職断念型」「進学断念型」「目的追求型」「自由志向型」「適性不明型」「その他」の 6 つにフリーター理由を分類している。

これらは高校在学中の生徒に対する調査であり、無業者やフリーターという進路選択も「予定」としてのそれではない。そしてそれぞれの調査が実施された 2 月という時点は、まだ大学や専門学校の入学試験の結果がすべて判明する以前であることから、この時点ですでに進学を断念した者は捕捉できていても、最終的に進学先が決まらなかったことによるフリーター選択という要因を過小評価する危険をはらんでいる。

では他方で、研究の対象を高卒予定者に限定せずフリーター全般に据えた諸研究では、フリーターが析出される背景としてどのような指摘がなされてきたのか。日本労働研究機構（2000 a）は、1999 年に 97 名のフリーターに対して行なったヒアリング調査に基づき、「(1)離学モラトリアム型」「(2)離職モラトリアム型」「(3)芸能志向型」「(4)職人・フリーランス志向型」「(5)正規雇用志向型」「(6)期間限定型」「(7)プライベート・トラブル型」という 6 つの類型を作成し、さらに(1)と(2)を合わせて「モラトリアム型」、(3)と(4)を合わせて「夢追求型」、(5)(6)(7)を合わせて「やむを得ず型」としている。

この分類（以下、「JIL 類型」と呼ぶ）の基準は、「フリーターとなった契機」と「フリー

ターとなった当初の意識」であるとされている（前掲書、22頁）。しかし「プライベート・トラブル型」以外の類型については「契機」よりも「当初の意識」言い換えれば「志向」に重点が置かれた分類であるといえる。それに関連して特に問題があると考えられるのは、「モラトリアム型」およびそれを構成する(1)(2)の2タイプの抽出のしかた、およびそのネーミングについてである。この分類では、(1)については「職業や将来に対する見通しを持たずに教育機関を中退・修了し、フリーターとなったタイプ」、(2)については「離職時に当初の見通しがはっきりしないままフリーターとなったタイプ」と説明されている（前掲書、22頁）。このように離学しないし離職時に「当初の見通し」が明確でないままフリーターになったことをもって「モラトリアム」と命名しているのであるが、この問題点は、第1に、彼らが離学ないし離職した原因までが「モラトリアム」的意識にあったという印象を与えること、第2に、彼らが「当初」だけでなくその後においても「モラトリアム」的意識を持ち続けているという印象を与えること、である。このヒアリング調査の記録をたんに再検討すると、彼らが離学ないし離職した理由には「モラトリアム」的意識だけでなく他の諸要因が強く働いていることが多く、また彼らはフリーターになった当初は「モラトリアム」的であってもその後進路の再構築に成功している場合も多いことがわかる。それにも関わらず、「モラトリアム型」という命名と、この類型に割り当てられたサンプルが全体の4割と大きな比重を占めることにより、フリーター析出要因として若者の意識や志向の不明確さを実際よりも誇張して示す危険をはらんでいる。

また、日本労働研究機構が2001年に都内の若者を対象として実施した調査では、フリーター経験がある対象者に対して、「あなたはなぜフリーターになったのですか。」とたずね、選択肢として「1. 仕事以外にしたいことがあるので 2. つきたい仕事への準備や勉強をするため 3. つきたい仕事の就職機会を待つため 4. つきたい仕事がパート・アルバイトでできるから 5. 自分に合う仕事を見つけるため 6. 正社員として採用されなかったから 7. 学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があったから 8. なんとなく 9. 正社員はいやだったから 10. 家庭の事情で 11. 自由な働き方をしたかったから 12. その他（具体的に ）」を挙げている（日本労働研究機構2001）。同調査の分析においては、この質問への回答結果をJILタイプの3分類に合わせる形で再集計しているが、再集計の手続きは複雑でやや恣意的である（前掲書、87頁）。しかもその再集計の結果によれば、「モラトリアム型」は47%と上記のヒアリング調査よりもさらに比率が大きくなっており、やはり若者の職業意識の「曖昧さ」の問題が強調される結果になっている¹⁾。

90年代半ば以降のフリーターの増加を、こうした若者の意識の問題に還元してとらえ

1) 筆者は日本労働研究機構が実施したこれらの調査や分析のほぼすべてにメンバーとして参加している。それゆえ、ここでの批判は、自分自身の過去の研究に対する反省に他ならない。

ることは、社会変化の全体像を見誤ることになりかねない（乾 2002, 黒澤・玄田 2001, 宮本 2002）。ここで必要になるのは、その本来の意味での「契機」ということへの再注目である。当事者である若者の「意識」や「志向」にフリーター析出の要因を求め、それに即して分類を行なうのではなく、時には彼らの「意識」や「意図」にとって外在的であるような、フリーターへの「きっかけ」＝「契機」をつぶさに見直すこと。その「契機」に働いている、「意識」以外にもおよぶ諸要因を洗い直すこと。また仮にフリーターになった当初は「モラトリアム」的意識が観察されたとしても、それが後にどのように変化しているかを追跡すること。これらの作業を通じて、フリーターへの「モラトリアム」的イメージを、適正な水準まで引き下げることが、本章の分析は目的とする。それは同時に、フリーター問題を個々人の意識というミクロな問題としてではなく、社会システム間の相互関係が不可避免的にまとうアポリア——解決不能な根元的課題——というマクロな問題として描き直す作業でもある。

その作業には次の2つの条件が求められる。それは第1に、「高卒予定者」などフリーターの中の特定の一部ではなく、より包括的なフリーターサンプルを対象とすること、第2に、調査する側の想定に基づいてあらかじめ設定された選択肢に対する回答分布ではなく、より未加工で不定形のデータを素材とすること、である。この条件に最適なデータは、先述の日本労働研究機構が実施したヒアリング調査の、500頁以上にわたる全記録である。この調査では、アルバイト情報誌を通じて募集した対象72名、別の情報誌を通じて募集した対象8名、専門学校を通じて紹介を受けた対象21名、合計101名（うちフリーター経験を有する者97名）に対し、1999年7月～11月にかけて、1人当たり1時間ほどのインタビューが実施されている。

この調査の記録には、きわめて大量で多面的な情報が盛り込まれており、様々な角度からの再分析が可能である。本稿では、このヒアリング記録を上記の観点から読み込み直すことに取り組む。

3. トランジション過程におけるフリーター析出の契機

フリーターとは言うまでもなく、学生でも正社員でもない存在である。これを言い換えれば、フリーターとは、教育システムを構成する組織である学校にも、職業システムを構成する組織である企業にも、正規メンバーとして所属していない存在である。しかし彼らは、フリーターになる以前のある時点までは、このいずれかのシステムに含まれる組織に正式に所属していたはずである。少なくとも義務教育段階までは、教育システム内の組織

である中学校に、原則としてすべての若年者が所属していることになっている。それゆえ彼らは何らかの時点で、それまで属していた組織から離脱することにより、フリーターとなったのである。

それではなぜ彼らは組織からの所属を外れることになったのか。高度成長期から 90 年代までの日本社会においては、新規学卒一括定期採用慣行を典型例とする、組織から組織への間断ない移行が極めて強く規範化されており、それを促進するような実践や慣行が張り巡らされていた。フリーターの増加は、そうした体制のほころびとして理解することができるが、ではそのほころびとは具体的にどのような形をとって現出しているのだろうか。個人が組織への所属を外れるリスクが結晶しているのは、どのような局面なのだろうか。それらの局面における組織からの離脱は、いかなる要因に後押しされているのか。そうした契機や要因に応じて、フリーターとしての生き方は影響を受けるのか。

これらの点を明らかにするため、日本労働研究機構（2000）がヒアリングを行なった 97 名のフリーター経験者が、最初にフリーターになった際の直接の契機について、再整理を行なった。整理の結果をまとめたものが表 1 である。各セル内の数字は、本章末に付属資料として提示してあるヒアリング対象者の ID ナンバーである²⁾。数字の後の「m」は男性を、「f」は女性を表わしている。複数のセルに該当するサンプルもいくつか存在したが、その場合は契機としての重要性を判断していずれかのセルに割り振った。

この表 1 は、次のことを示している。彼らが組織を離脱してフリーターになった直接の契機は、＜組織から組織への移行の失敗＞という形態をとっている。そして移行の失敗は、大きく(a)移行のための行動をとっていたにも関わらず生じた失敗（表 1 上部）、および(b)そもそも移行のための積極的行動をとっていなかったために生じた失敗（表 1 下部）、の 2 つに分けることができる。この両者の区別は重要である。なぜならこの両者は、移行というライフコース上の課題そのものに対する若年者の志向性の違いを表しており、フリーターの増加がどこまで若者自身に帰属する要因に由来しているのかを検討するためには欠かせない区別であるからである。それゆえ本稿での分析においてはこの「移行行動」の有無ということが重要な焦点のひとつとなる。

そして、上記の(a)と(b)の中にはそれぞれさらにサブカテゴリーが見出される。まず(a)の、移行行動をとったにも関わらず失敗したケースには、(a-1) 移行先の組織が実施する選抜において選抜されなかった場合、(a-2) 移行したが移行先の組織に適応できず自ら離脱した場合、(a-3) 移行そのものが本質的に長期間かかるものであり、まだその途中である場合、という 3 つのパターンが含まれる。(a-3) は移行の「失敗」ではないにせよ、

2) ヒアリングの全記録は日本労働研究機構（2000）を参照。

表1 フリーター析出の契機

	教育システム内部の移行 <41名>	職業システムへの移行 <56名>
(a) 移行行動あり	(a-1) 移行先の選抜に非選抜 <21名>	(a-1-e) <14名> 受験失敗 [2m, 3m, 4m, 7m, 8m, 12f, 15f, 25f, 44f, 58f, 80m, 81m, 84m, 88f] (a-1-j) <7名> 就職試験失敗 [9m, 66m, 67m, 68m, 71f, 76f, 79m]
	(a-2) 移行先への不適応 <33名>	(a-2-e) <16名> 中退 [1m, 10m, 11f, 14f, 17f, 18f, 20f, 21f, 28f, 57f, 82m, 94f] 直前の変更 [16f, 22f, 23f] 進路変更 [83m] (a-2-j) <17名> 早期離職 [30m, 31m, 32m, 33m, 34f, 35f, 36f, 37f, 38f, 45f, 69m, 73f, 74f, 75f, 77f, 78f, 89f]
	(a-3) 移行継続中 <24名>	(a-3-j) <24名> オーディション・レッスン等 [39m, 41m, 42m, 43m, 47f, 48f, 49f, 51f, 53f, 54f, 55m, 56m, 59f, 60f, 61f, 62f, 63f, 64f, 65f] 求職中 [52f, 70m] 時期待ち [86f, 87f, 90f]
(b) 移行行動なし	(b-1) 阻害要因のない移行行動の欠 <11名>	(b-1-e) <4名> 進学準備せず [19f, 24f, 27f, 92m] (b-1-j) <7名> 就職活動せず [5m, 6m, 13f, 26f, 29f, 40m, 46f]
	(b-2) 外的阻害要因による移行行動の欠如 <8名>	(b-2-e) <7名> 家庭・家計 [50f, 85f, 91f, 93m, 96f] 異性関係 [95f, 97f] (b-2-j) <1名> 病気 [72f]

いまだ「成功」してはいないという意味で、(a)に含めている。また(b)の、積極的な移行行動そのものをしていなかったために移行できなかったケースの中には、(b-1) 特に外的な阻害要因がなくほぼ純粋に本人の意識等を理由としていた場合と、(b-2) 何らかの外的・突発的な阻害要因が発生したため移行行動をとれなかった場合、という2つのパターンが含まれる。

また、＜組織から組織への移行の失敗＞は、必ずしも、教育システム（内部の組織である学校）から職業システム（内部の組織である企業）への移行の失敗として生じているわけではない。97名中41名（42%）と相当多くの事例が、教育システム内部における組織間での移行、すなわち進学の失敗を契機としてフリーターに参入している。それゆえ表1では、表頭に記しているように、移行の失敗が教育システム内部において生じた場合と、教育システムから職業システムへの移行において生じた場合との2つに分類している。

以下、各セルに含まれる事例に関して、ヒアリングから得られた質的データに基づきつつ、移行の失敗をもたらす諸契機・諸要因およびその影響について、より詳しく検討を加えていこう³⁾。利用するデータが定性的であるため、分析の一部は類推的仮説に留まる。また、以下の分析ではパーセンテージなど数量的な記述も用いるが、サンプル数の限定性

により、それらの数値はあくまでひとつの目安にすぎない。これらの限界は伴うが、計量的な分析では得難い豊かなリアリティは、そうした限界を補って余りあるものである。

(a) 移行行動をとった上での移行の失敗

(a-1) 移行先の選抜に非選抜

まず、移行行動をとったにも関わらず、移行先が行なう選抜において拒否されたために移行できずフリーターになったケースの特徴をみよう。

(a-1-e) 教育システム内での非選抜

この中で、教育システム内部の移行に失敗した例 (a-1-e, e は education を意味する) は具体的には上位の教育段階の学校の入学試験を受験したが不合格になり、その後浪人を經由するなどしてフリーターになった者を意味しており、該当者は14名である。また、教育システムから職業システムへの移行に失敗した例 (a-1-j, j は job を意味する) は、具体的には企業や公務員などの採用試験に落ちたことをきっかけとしてフリーターになった者を意味しており、該当者は7名である。この両者を合わせると21名となり、97名中の22%を占める。すなわち、このヒアリング調査の対象者の約5人に1人は何らかの「試験に落ちた」ことを契機としてフリーターになっているのである。しかもその内訳では、教育システム内の入学試験の失敗が、職業システムへの採用試験の失敗の2倍となっている。この点は、これまでのフリーター研究がほとんど指摘してこなかった盲点といえるだろう。

なお、(a-1-e) は14名中8名、(a-1-j) は7名中5名が男性であり、合わせて (a-1) 全体では21名中13名 (62%) を男性が占める。全ヒアリング対象者97名のうち男性は34名 (35%) にすぎないことと比べると、この (a-1) には男性の比率がきわめて高いといえる。

教育システム内部で入学試験に失敗した (a-1-e) の中では、四年制大学を受験した者が14名中10名を占めており、それ以外の4名はそれぞれ専門学校、短大、短大から四年制大学への編入、社会人としての大学院受験と多様である。このように四年制大学の受験に失敗してフリーターになるケースが一定量を占めていることは一見不思議である。なぜなら、四年制大学への現役志願者総数のうち入学者数が占める割合 (合格率) は、1990年の52%を底として年々上昇しており、2000年には77%に達しているからである⁴⁾。ただ、

3) 次節での引用はすべて日本労働研究機構 (2000) に掲載されている該当ナンバーのヒアリング結果からのものである。

4) 文部省 (2000) の66頁に基づいて算出した比率。

この2000年時点でも現役の四年制大学志願者と入学者の差は13万6千人におよんでいる。そしてこの集団が、近年になってフリーターを生み出す母体としての意味を強めているということが推測される。すなわち、フリーター増加現象の一角を構成する問題は、四年制大学の受験に失敗する者が増えたことではなく、受験失敗後に再受験の意志をなくす者が増えたことにあると考えられる。それはなぜなのか。

考えられる要因の第1は、長引く不況による家計の逼迫のため、一度大学受験に失敗すると、浪人期間中に学費や生活費をアルバイトで稼がなければならないケースが少なからず発生しているということである。浪人期間中に勉学に集中できず、アルバイト等に時間を割いているうちに、生活におけるアルバイトの比重が増大し、再受験の意欲を失うという例が観察される。

「うち、きょうだい5人いて、家計が厳しくて…浪人したら働けと言われて、浪人しちゃったんです。初め勉強していましたが、途中からインターネットを覚えたんです。これはすごいなと思って、ほんとに1つの図書館だな、図書館よりでかいなと思って、これで何でも勉強できるなと思ったんです。(中略)ほんとに大学行くのは資格取るだけだなと思って。お金の問題もありましたけどね。」(No. 2m, 21歳, 高卒)

「(浪人中にアルバイトを始めた理由について) もともと大学も2部で受験したんです。高校生の時から親に大学に行くなら学費は自分持ちといわれていたから。それで、お母さんから、地元のファーストフードで募集しているからやればと言われて、ハンバーガーショップで働いているうちに、だんだん気持ちが切り替わって行って、接客という仕事がおもしろいと思い始めた。最初は、大学に行くつもりだったけれども、仕事が忙しくなって、勉強がおろそかになってくる反面、だんだん接客が自分に向いているかなと思うようになった、というような感じかな。最初は学費を稼ぐということでしてたバイトだけれど、その次に、好きになって。」(No. 88f, 21歳, 高卒)

浪人期間中にアルバイトをしていた例は、(a-1-e)に属する14名のうち6名(2m, 3m, 7m, 8m, 58f, 88f)を占める。

他方では、そもそも家計面から浪人という選択肢が許されていない場合もみられる。これは女子に多いと思われる。

「浪人も考えましたが、やはり大学にはお金がかかるし、お母さんも推薦で行くんだったらいいよという形で、でも大学は無理です。お金もないし、したくてもお金がかかるじゃないですか、自分で貯めてまで行きたいとは思わないから。」(No. 15f, 19歳, 高卒)

このように、受験失敗後にフリーター化する現象に対しては、家庭の経済状況という要

素が直接・間接の両面で大きく関わっている。

また経済的側面とは異なる第2の要因は、移行に対する本人の姿勢である。受験という形で進学行動を一応としてはいながら、実際には進学動機等がそもそも不明確であったため、挫折によって再挑戦への意欲が容易に失われるということである。このようなケースでは、最初の受験の際の準備も充分でない場合も多い。

「(大学受験について) あんまり、漠然として、何かこれがやりたいというのがなかったし、とりあえずという感じで。専門学校へ入っちゃうと一般職ですから。」(No. 3m, 23歳, 高卒)

「2年間予備校生をやって、やっぱり漠然と、ほかに何もすることがなかったって言っちゃえばそうなんでしょうけど、あとは、周りの余計な期待とでもいうんでしょうかね、とりあえず勉強してって。それが、センター試験をボイコットして。そのときに親とも大げんかしましたし、それからですね、すべてが始まったというのは。それまで親の期待にそって、悩みながらもとぼとぼ歩んでいたというような感じで、こうじゃないこうじゃないとか、嫌だな嫌だなとかと心のどこかにありながらも、結局、抵抗することができずにいた。それが、あの日に爆発して、それから何もしない日が続いて、挫折感と言うんでしょうかね、魂が抜けたような、そういう日々を送っていたんですよ。」(No. 4m, 23歳, 高卒)

「(大学受験で美大と文系を受けたことについて) 美大も受けたのは、そのころ多少美術が好きだったんで、何となく受けたんですけど。そのための勉強とかはやっていないですね。文系というのも特に何かやりたいというわけではなくて。」(No. 7m, 26歳, 高卒)

これらのケースは、移行行動をとらなかった(b)に属するグループに、意識面ではきわめて接近している。相違は、移行への本人の姿勢が充分でなくとも、とりあえず受験という移行行動をとらせる環境要因が存在していたという点にあるにすぎない。

しかし第3に、上の第2の要因と同じく本人の姿勢の問題でありながら、第2の要因におけるような志望動機の不明確さとは対照的に、特定の進学先に固執するあまり、そこでの選抜で拒否されるとすべてをあきらめてしまい、再挑戦や転換を試みないという場合もある。

「高校3年のとき進学して服飾の専門学校に行こうと思ったんですけど、その入試に落ちてしまったので、ほかの学校は全然受ける気がしなかった。行きたい学校がそこだけだったんで、ほかのところに行くんだったらフリーターでいいやというふうにそのまま。」(No. 12f, 18歳, 高卒)

「映画の関係がやりたくて、そこ以外だったらどこも行きたくなかったんですよ。でも、1年

間浪人するというのも、そこまで入りたいというわけでもなく、行くんだったらそこしか行きたくないというものだったので。」(No. 44f, 19歳, 高卒)

さらに、第4の要因として仮説的に考えられるのは、高校における進学指導の問題である。すなわち、受験先大学の選択において、高校等からの指導が緊密ではなくなっており、合格可能性の低い大学でも行きたいと思えば受けてみるような行動が増加しているという可能性である。日本労働研究機構(1998)は、就職先の決定における高校の指導が弱くなっていることを指摘しているが、それと同様のことが進学指導においても発生している可能性がある。高校が行なう就職指導の問題点については頻繁に指摘されているが、進学指導の問題点や不十分さについてもさらに検討が進められるべきである。

「1回、浪人するとだめですね。やはり、現役で受からないと。やはり、自分が高望みをしていたので、もうちょっと低い大学を受ければよかったなと思いますよ。」(No. 8m, 28歳, 高卒)

以上のように、教育システム内部における選抜での失敗という形でフリーターが出現する背後には、①家計要因、②意識要因(不明確)、③意識要因(きわめて明確)、④学校の進路指導要因(不十分)という4つの要因が少なくとも存在しているといえる。

ただ指摘しておきたいのは、この(a-1-e)に含まれるケースでは、受験に失敗して一時期フリーターになった後に、進路を別の方向に転換することに成功している例が多いということである(14名中11名: 2m, 3m, 4m, 7m, 8m, 44f, 58f, 80m, 81m, 84m, 88f)。その典型は、専門学校を受験し直すというパターンである(11名中7名: 3m, 4m, 7m, 8m, 80m, 81m, 88f)。これは特に男性に多いコースである。受験という移行行動をとった上で、大学等が行なう選抜において拒否されてフリーターとなった場合、進路意識を切り替えることに成功しやすい理由として仮説的に考えられるのは、その該当者においては1) そもそも移行行動が必要であるという前提的認識が成立していること、2) 高校卒業後に進学を考えると、学校という教育システム内組織に対する彼らの逸脱性が強くなかったこと、3) 入学試験という「他者」の目からの厳しい評価に直面することにより、自己についての認識が客観的で現実的なものに修正されやすいこと、などである。

進路転換に成功しておらず模索を続けているのはいずれも女性であり(12f, 15f, 25f), うち2名(12f, 15f)はそれぞれ18歳・19歳と年齢が若い。

(a-1-j) 職業システムにおける非選抜

続いて、同じく組織が行なう選抜に拒否されてフリーターになったケースであるが、それが職業システムに属する組織による選抜であった場合、すなわち企業等の採用試験に合

表2 採用試験不合格によりフリーターになったヒアリング対象者の特性

	現在年齢	不合格時 学校段階	志望職種	その後の進路志望
No. 9m	29	大学	公務員 (民間は活動せず)	簿記専門学校通学後、再び就職活動に失敗して現在は失業者支援 NPO 加入。
No. 66m	23	大学	公務員 (民間の内定辞退)	公務員試験再挑戦中
No. 67m	25	大学	旅行業界 (1社の内定辞退)	旅行業界求職継続中
No. 68m	27	大学	公務員 (民間に就職)	1年半勤務した会社を辞めて公務員試験再挑戦中
No. 71f	19	高校	不明確	模索中
No. 76f	24	大学	マスコミ	プライダル司会志望
No. 79m	20	高校	公務員	ゲーム関係の専門学校に入学

格しなかった例の特徴を検討しよう。ここには7名が含まれ、97名中7%となる。なお、日本労働研究機構(2001)の首都圏若者調査でも、フリーターになった最も重要な理由として「正社員として採用されなかったから」ことをあげた比率は、現在非フリーターのサンプルでは6.1%、現在フリーターのサンプルでは6.7%であり、ヒアリング調査における(a-1-j)カテゴリーの比率とほぼ一致している。この7名の、現在年齢、採用試験不合格時の学校段階、目指していた職種、その後の進路志望を表2にまとめた。

この表から意外な印象を受けるのは、7名中の4名(いずれも男性)が民間企業ではなく公務員採用試験に不合格になっていることである。このヒアリング調査のサンプルで見限り、90年代半ば以降の民間企業の新規卒者採用抑制を直接の原因として職業システムへの移行に失敗したケースは多くないということになる。もっとも、公務員志望者が実際の採用者数を上回って増加しているとすれば、それは民間企業の採用抑制の余波である。また、高卒女子であるNo. 71fには、民間企業の採用抑制が直接に影響していることが読みとれる。これは①正規労働市場要因であるといえる。

「3年生の頃は東京にある靴を作る専門学校に行きたいと言ったんですけど、親が行かせてくれなかった。自分には向いていないからって。それで就職活動をしました。自分の田舎は(四国)全く就職するところとなくて、全然。だからみんな出るしかないんです。それで県外の企業の学校推薦をもらって、試験受けに行ったんですが、そのときに大雨で車が止まって行けなくなって、試験が延期になっちゃったんです。1ヶ月ぐらいの後に試験をしたんですが、そしたら受からなかった。でもそこに受かって四国内の店舗の採用だったから、ほんとに東京に行きたかったから、落ちて別によかった。その後受ける企業がなくて、それで、2月の試験休みに

東京に来て職安とかにも行って探したんですが、なかった。」(No. 71f, 19歳, 高卒)

残る2名はそれぞれ希望する業界が旅行業界、マスコミ業界と明確であり、そこに焦点を絞って就職活動をした結果、不合格に終わっている。この両者はいずれも「都内の有名私立大学」を卒業しており、学歴面では一定の自信をもって特定業界を目指したことがうかがえるが、競争が激しい人気業界であったため失敗している。

このように、(a-1-j)に含まれる7名の事例を見る限りでは、職業システム側の変化がフリーターの析出に大きな影を投げかけているとは言い切れない。どちらかといえば、公務員や人気業界など、特定の移行先に志望を絞っていることが、就職活動の失敗につながっているように見受けられる。すなわち、先に(a-1-e)でも指摘した②意識要因(きわめて明確)が、(a-1-j)においても重要になっている。

なお、この7名のうち3名(66m, 67m, 68m)は調査時点でももともと志望していた職種への再挑戦中であり、他の3名は志望を変更して新しい進路を目指している。このように、このカテゴリーにおいてはフリーターになった後の進路展望が比較的明確である者が多くを占めている。それゆえ、やはり先に(a-1-e)で指摘した、進路転換を促進する3つの条件が、(a-1-j)についても当てはまるということが考えられる。

(a-2) 移行先への不適応

移行行動をとったにも関わらず移行に失敗した(a)の中で第2の類型は、選抜等も突破していったん新しい組織に移行したが、そこに適応できず比較的早期に離脱しフリーターになるというケースである。この類型には、移行先組織が教育機関である場合(a-2-e, 16名)と、企業である場合(a-2-j, 17名)が含まれ、両者の比重はほぼ拮抗している。前者はJILタイプの「離学モラトリアム型」、後者はJILタイプの「離職モラトリアム型」のサンプルを多く含む。サンプル全体の中での比率はそれぞれ16%、18%であり、合わせると全体のほぼ3人に1人が移行先組織への不適応を契機としてフリーターになっている。

(a-2-e) 進学先への不適応

進学先に不適応を起こして離脱した(a-2-e)は、離脱時期の観点から、中退の場合(12名)、入学直前にいやになり進学を取り消した場合(3名)、卒業時に進路変更を考え別の教育機関に再入学した場合(1名)とに分けられる。この中で直前変更者に分類したNo. 22fは予定進路がワーキングホリデーで厳密には教育機関ではなく、また卒業後に再入学したNo. 83mは不適応とは言い切れないため、以後の検討では除外して考える。残りの14名のうち、12名(86%)が女性である。

彼らが離脱した教育機関の学校段階は、大学4名(1m, 17f, 20f, 82m)、専門学校8名

(10m, 11f, 14f, 18f, 21f, 57f, 94f, 16f), 短大1名(23f), 高校1名(28f)となっており, 専門学校の比重が大きい。ではなぜ専門学校への不適応が多いのだろうか。

離脱した専門学校の学科は, 英語(10m), ダンス(11f), ホテル(14f), 写真(16f), 保育(18f, 21f), ビジネス系(57f), 美容(94f)ときわめて多様である。また専門学校に不適応を起こした理由についても, 「道が開けそうもない」こと(10m), 人間関係(11f, 14f, 21f), 教育内容(14f, 21f), アルバイトの比重の増大(18f), 費用等の入学条件に関する齟齬(16f)と多様であるが, あえて集約するならば, 入学以前の情報量の不足ということになるだろう。その典型例が四国の高校から東京の専門学校に入学を予定していた No. 16f である。この事例では, 高校が行なう専門学校進学指導が不十分であったことが情報量不足の大きな原因となっている。

「高3で受けた専門学校は東京のカメラの学校で, 試験は面接だけだったんです。書類選考と。学校がそれほど取り寄せてくれなかったんです。カメラの学校の, 専門学校のものを, 東京の, 書類みたいなもの。学校は, 結構, 関西が近いんで, そっち方面ばかり資料を取ってくれるんです。大阪は親戚の人がいて, 余り好きじゃないんで。東京のほうは1校か2校しかないというふうに言われて, で, 見に行ったんですよ, 本屋さんに。で, 自分で見て, ここのを取り寄せてくださいということを書いて, パンフレットだけ取り寄せてもらって, そこに決めたんですけど, で, それを自分で調べて, 先生に言って, 「受けに行きます」という形だったんで, 受かった後に, 寮とかはないって知っていたんですけど, 部屋とかを借りるときに, 1つ暗い部屋がないとだめだとか…。すごいそういう条件が多くて。1年間にかかるお金が500万ぐらいトータルでかかると言われたんで。書類にはマンションのこととか書いてなかったんですよ, 何も。で, 聞いて, マンションのお金とか, 最初のやつを全部含めれば, それぐらいはいくかもしれませんという話になったんで。それでもう, いやになって, ほかの専門学校に行くことは, もう考えなかった。で, 東京に来れば, まあ, 何かあるかなと思って。」(No. 16f, 20歳, 高卒)

この No. 16f は, 学校が居住地から遠方であったことも情報量不足の原因であるが, 近隣の学校を受験した者でも入学後に期待はずれを感じている場合が多い。もともと専門学校は学校によって多様性が大きいため, 進学先決定時に見学等による情報収集が不可欠であるはずだが, それを行なわなかった場合に, 早期離脱が生じる結果になっていると考えられる。

大学に不適応を起こしたケースでも同様に, 事前の情報収集が充分でないという要因は存在しているが, 大学の場合は高校在学時の文系/理系等のコース分けや合格可能性によって進学先が決まってしまうという状況が, 専門学校の場合とは別の不適応促進要因となっている。特にこの問題は, 理系男子の場合に多く生じているようである。

「(進学先大学は) 別にやりたいことはなかったんですよ。(工学部に進学したのは) もともと理系で、そのまま流れに沿っていくというような感じで。」(No. 1m, 20 歳, 大学中退)

「進路は、はっきり申し上げまして自分で明確な意思がなくて、親や先生から吹き込まれていたと思います。とりあえず大学へ行って卒業すれば道はあるだろうと、そういう感じで流されていた部分があるので、後悔しているんですけども。たまたま学校で文系の勉強よりも理系のほうが僕はできたので、数学とか理科とか。それを見て先生が理系のほうがいいんじゃないかと。就職も理系のほうがいいと言われていた時代だったもので、そっちでいいのかなとあいまいな気持ちで志望して理系の大学に入ったんです。進学校でみんな進学という感じだったんです。学科は、推薦入学がたまたまその金属工学か化学か2種類しかなくて、どっちを選ぶかといったら金属のほうがいいかなと思って。そこでも楽しちゃったという感じなんです。(中略) 95年に高校卒業して、すぐ大学に進学しました。工学部の金属工学に行きまして2年間頑張ってみたんですけど自分に合わないと思いました。」(No. 82m, 23 歳, 大学中退)

以上の、情報不足および既定路線化した進路選択の不全という2つの要因は、いずれも本人自身の問題——意識要因(不明確)——に由来すると同時に、先述したように学校の進路指導要因にも深く関わっている。ここでの進路指導要因は、強弱の両面にわたっている。すなわち、情報不足の場合は進路指導が弱体化し不十分であることが原因であるのに対し、既定路線化した進路選択の場合は、ある特定の方向への進路指導が強力すぎ硬直化していることが原因となっているのである。

しかしそれだけではなく、進学先の教育内容自体の空洞化・形骸化という問題も重要であることは言うまでもない。

「あまり勤勉な態度じゃないし、学生側も。教授のほうもそこまで、そういう学生が相手だからというのもあると思うんですけど、あまり、ただ1人でしゃべっているだけという態度とか、あまり意味がないかな、自分に対して。」(No. 17f, 20 歳, 大学中退)

「英米文学科に入ったのは、語学と外国や、あと本を読むことに興味があって、あと言葉というのにすごく興味があって、勉強してみたいなと思ったんですけども、何か考えていたのとは違って。もっと何か自分で勉強したりしたいなと思っていたんだけど、次から次へとテキストを渡されて、あんまりおもしろくないテキストをただ和訳してみたりとか、そういうことが時間のむだかなと思って。」(No. 20f, 20 歳, 大学中退)

以上のような、情報不足/既定路線化した進学先決定の機能不全を生み出す①意識要因(不明確)、②学校の進路指導要因(不十分)、③学校の進路指導要因(硬直的)、④教育内容要因という4つの要因に加えて指摘しておきたいのは、先に(a-1-e)に関しても指摘し

た、学費や生活費を補うためのアルバイト活動の比重が「本業」を凌駕するまでに増大するという要因である。

「工学部の金属工学に行きまして2年間頑張ってみたんですけど自分に合わないと思いました。その間、平行してファミリーレストランでアルバイトをずっと続けていたんですよ。こちらの仕事のおもしろさにひかれていきました。楽しかったので1つのアルバイトをずっと。それでやっていて、どんどん一生懸命やったら店長に認められたので、1年足らずでリーダー任されるようになって。年上の方ばかりなので、そうやって使ってくれたという、そういうのがうれしくて、もっとやってやろうと思いました。その店長もまたすごく魅力ある人で、いろいろおもしろさ、奥深さを学びました。尊敬する店長の話聞いて接客の究極といいますか、ホテルのおもしろさというのも奥深くてやりがいがあるなと思ひまして、その時点でホテルのほうに行こうと思ひまして、大学を2年でやめたんです。そしてこの学校を目指すためにここで1年間学費を稼ごうかなと思ひましてフリーターに。」(No. 82m, 23歳, 大学中退)

「(専門学校をやめた理由について) 実質的には、2年生の夏には、もう、ほとんど行っていなかった。もう2年生の夏ぐらいからは、「少し違うかな」という感じで、あまり学校にも顔を出さないようになった。ちょっと学校をやめたときに、ほかのことをやりたかったっていうのもあったんですけども、どうしても朝、起きれなくなるような状況を、自分で作りだしてしまったんです。夜、仕事をしていて、水商売をやっていたんですけども、それがどうしても抜けられなくなって、そのとき、もう学校をやめるころからずっとやっていて。もうずっと、夜だったので、そっちをやっています。」(No. 18f, 20歳, 専門学校中退)

(a-1-e)においても述べたが、このように「本業」としての学生生活を浸食するほど長い時間と多くのエネルギーをアルバイトに投入することになっている間接的な背景には、やはり⑤家計要因があることが推測される。また、アルバイトとしての働き方、雇用する側から見ればアルバイトの働かせ方が変化してきたことも考えられる。すなわち、職場によってはアルバイトの活用已成功しており、「おもしろさにひかれ」「もっとやってやろうと思うようにな」るほどの魅力を若者に与えることができるようになっているということも無視できない。これを⑥非正規労働市場要因としておこう。(a-1-e)に関しても、この要因が働いていた可能性がある。

以上少なくとも6つの要因により、高校卒業後に首尾良く進学したとしても、フリーターになるリスクはかなり高くなっているのが現状である。高卒就職市場がきわめて縮小しているため、とりあえず進学する者が増加していることも重要な背景となっている。

なお、(a-2-e)の問題点は、先の(a-1)とは対照的に、ヒアリング調査時点で進路転換に成功している者が14名中4名(1m, 10m, 21f, 82m)にすぎないということである。

逆に、明らかに展望を失って模索している者が5名(14f, 17f, 16f, 20f, 23f)いる。もっとも、この5名はそれぞれ19歳, 20歳, 20歳, 20歳, 21歳とかなり若く、不適応による教育機関離脱後まだ間がないために迷っている状態にあるといえる。他の4名(11f, 18f, 28f, 57f)は、一応志望がある(それぞれ歌手, 事務, 医療事務, バートン)が、漠然としており、実現可能性は高くはないように見受けられる。これら9名はいずれも女性であり、男性の場合ほどは進路決定や経済的自立への周囲からの期待が薄いことが重要な原因であると思われる。しかしそれに加えて、組織からの選抜において拒否された場合に比べて、自らの意思で組織から離脱した場合、自分自身に対する認識を現実的な方向へと再構成し直す契機とは相対的になりにくいことが推測される。

(a-2-j) 就職先への不適応

移行行動をとっており、実際にいったん移行したにも関わらず、移行先組織から早期に離脱してしまうケースのもう1つの類型は、移行先組織が企業等の職業システムであった場合、すなわち早期離職者である。この(a-2-j)に含まれる17名のサンプルのうち12名(71%)が女性であり、(a-2-e)よりは男性比率が高いが(a-1)に比べると低い。

この17名が離職してフリーターになった時点での学歴、離職するまでの在職期間、離職した職場・職種の内容、離職理由を整理したものが表3である。

これらの事例の離職理由は、労働条件の劣悪さ(30m, 31m, 34f, 35f, 37f, 78f)と、仕事内容や人間関係などによる「つまらなさ」(32m, 36f, 37f, 38f, 45f, 69m, 73f, 74f, 75f, 77f, 89f)の2つに大きく分けられる。事例の数からみると後者の方が多いが、前者が希なわけではない。この両者の背景となっているのは、そもそも全体的な若年労働市場の縮小によって入職時の選択肢が限定されているということであり、言い換えれば正規労働市場要因の影響である。しかし、そうした労働需要側の要因に加えて、過去における供給側の就職先選択時における志望の不明確さもやはり少なからず影響しており、意識要因(不明確)が働いている。

「高校3年生の初めのころは進路は、とりあえず就職する方向ではいました。具体的に、この職種、この業種とかは、別になにもないです。とりあえず、そのときは何をしたかったかというのがなかったんで、わりと何の仕事をするか結構時間がかかったんです。とりあえず形だけ、何かをしなくてはいけないと思ってたんで。」(No. 31m, 23歳, 高卒)

「大学の勉強は割と楽しかったんですけども、それを終えてどうするって、自分でこういう仕事につきたいとか、こういう職業人になりたいっていう希望がなかなか見えなかったんです。秋頃までそんな感じで、何もしていないのを親がみかねて、とりあえずどこでもいいから入れというようなことで話を持ってきた。それで、その仕事が好きということは全くなかったんです

表3 採用試験不合格によりフリーターになったヒアリング対象者の特性

	学歴	在職期間	離職した職場・職種	離職理由
No. 30m	高卒	10 ヶ月	美容院・美容師見習い	ひどい手荒れ
No. 31m	高卒	6 ヶ月	小規模家電小売店・接客, レジ, 修理など	報酬
No. 32m	大卒	3 ヶ月	建材商社・営業	取引相手に文句を言われることが多く面白くなる
No. 33m	大卒	1 年半	派遣社員として自動車会社で CAD	派遣という立場の不安定さ
No. 34f	高卒	2 年	スーパー	サービス残業の多さ, 子供ともっと接したい
No. 35f	高卒	1 年半 + 半年	家具工場・技能職→携帯電話販売	肉体的きつさ／経営のルーズさとサービス残業の多さ
No. 36f	短大卒	7 ヶ月	契約スチュワーデス	先輩に恵まれない, 頑張っても認められない
No. 37f	短大卒	10 ヶ月 + 1 年半	小規模建築清掃会社・事務→精密機械会社・経理事務	休みの少なさ, 勤務時間の長さ／同僚との人間関係
No. 38f	高卒	1 年半	ゴルフ場・ウェイトレス	体を壊したこと, 同僚や上司との人間関係
No. 45f	高卒	1 年	車内販売会社	シフトや休みの希望が通らない, 責任が重い, 音楽活動と両立しにくい
No. 69m	高卒	1 年 + 半年 + 4 年 + 1 年半	眼鏡卸会社→レーザープリンター組立補助→通関業→工具商社・事務	(3 社めの会社) 異動事例の出し方の無神経さ
No. 73f	短大中退	3 年弱	契約社員としてインターネット・プロバイダーの電話対応係	休みをとりにくい
No. 74f	専学卒	2 年半	建築会社・経理事務	給料の低下, 同僚との人間関係
No. 75f	短大卒	1 年 2 ヶ月	クレジットカード会社・審査事務	仕事の単調さ, 接客のバイトに興味に移る, スチュワーデスになりたくなる
No. 77f	高卒	6 年 2 ヶ月	大手都銀・事務および窓口業務	同期や後輩の採用がなく精神的に孤独
No. 78f	学卒	3 年 半 + 2 年弱	出版社・編集→電機卸店・営業事務	経営の不安定さ, ワンマン同族経営／有給なし, 人使いの荒さ, 雇用契約のルーズさ
No. 89f	専学卒	半年	婦人服製造卸会社・商品管理	仕事のつまらなさ, 暇さ

けれども、僕も会社員という肩書きが欲しいという気持ちがあって受けました。」(No. 32m, 26 歳, 大卒)

「特に何方面とか、何系とか、ほんとうになかったの。短大はほとんど一般職、どこの会社説明会へ行っても、それで、事務で、ほぼみんながお休みの日に私もお休みがいいと思っていた

ので、土日がお休みでお給料がそこそこだったらどこでもいいやぐらいにしか思っていなかったです。」(No. 75f, 23 歳, 短大卒)

そうした不明確な意識の明確化を伴わないままに学校が強力な進路指導を実施して就職させた場合に、早期離職が容易に発生すると考えられる。

「僕の学校は、地方というのもあると思うんですよ。基本的にはそういうフリーターなんか絶対許さないみたいな感じで、はっきり言って何でもいいからやりなみたいな感じで。自分のつきたい職業についている人なんかそんなにいないんだから、それは自分も言われたんですけども、何かそれでいいのかなと一応思ったんですけども、学校の気持ちもわかるなというのもあるんです。(中略)それで僕と仲良しの人(先生)がいて、そういうのを聞いていたらしく、こういうところがあるんだけどもみたいな感じで。」(No. 30m, 19 歳, 高卒)

それとともに、働いている間に何らかの別の職業に就きたいという気持ちが強くなったこと、すなわち意識要因(きわめて明確)が離職につながった例も複数観察される。

「何もやりたいことがなくて、ただ会社をやめたいだけというふうに思ったら、やめられなかったと思うんですよ。やめるという踏ん切りがつかなかった。でも、ほんとうにスチュワーデスの仕事をやってみたいなというふうに思って、ほんとうにそれを目指そうというふうに思えたから。」(No. 75f, 23 歳, 短大卒)

以上をまとめれば、(a-2-j)の早期離職が生じる背景としてヒアリング調査から観察されるのは、①正規労働市場要因、②意識要因(不明確)、③学校の進路指導要因(硬直的)、④意識要因(きわめて明確)である。

この(a-2-j)に含まれる17名が(a-2-e)と異なるのは、模索中の2名を除く15名が、何らかの具体的な仕事の希望をもっており、その実現に向けての努力を試みているということである。離脱したとはいえ一度は職業システムに正規メンバーとして所属したという自信や、それを通じて職業システムというものについて彼らは何らかの経験と認識を獲得したということが、彼らをよりよい所属先の開拓に向けて積極的な態度を取らせる動因となっているのかもしれない。このヒアリング調査のサンプルに含まれる早期離職者の多くにとって、フリーターは、次の仕事に向けての「一休み」の期間としての性格が強いといえる。

(a-3-j) 職業システムへの移行の継続

続いて検討する(a-3-j)は、これまでの(a-1)および(a-2)のように組織から組織

への移行に「失敗」したわけではなく、フリーターと平行して特定の職業への参入努力を継続しているグループである。このカテゴリーは JIL 類型では「夢追求型」(「芸能志向型」および「職人・フリーランス型」)とされるサンプルを多く含む。なお一応ここに分類した 86f, 87f, 90f の 3 事例は、予定の進路がすでに決まっていたそれまでの間だけフリーターをしていたケースでありやや異質なので、以下では除外して考える。それ以外は 21 名であり、サンプル全体の 22%、約 5 人に 1 人を占めている。そのうち、女性が 14 名 (67%) で、サンプル全体の中での女性比率とほぼ等しい。

この 21 名が目指す職業の内訳は、次の通りである。バンドや歌手等の音楽関係が 6 名 (39m, 41m, 42m, 48f, 49f, 51f)、劇団や俳優等の演劇関係が 4 名 (43m, 47f, 53f, 54f)、デザインや写真等のアート関係が 3 名 (55m, 59f, 62f)、脚本やフリーライターなどの文章関係が 2 名 (56m, 64f)、美容関係が 2 名 (61f, 63f) プロスポーツ関係が 1 名 (60f)、調理関係が 1 名 (65f)、コンピューター関係が 1 名 (70m)。これらの職業はいずれも何らかの「才能」や特殊スキルを必要とし、多くは雇用されることなく自由業の形態をとる。

彼らはそれぞれの職業をただ希望するだけでなく、実際にそれに向けての活動や勉強を行なっている。活動や勉強の内容は、養成所等に所属しレッスンを受ける、オーディションに応募する、投稿する、すでにその職業で一定の収入を得る、など様々である。彼らの共通点は、アルバイトは彼らの生活において副次的な意味をもっており、あくまで生活費を得るために従事しているにすぎないということである。

確かに彼らの志望する職業の実現可能性は不明であり、その点ではリスクをはらんだ存在ではある。しかし、このような形でしか参入できない職種というものは過去からずっと存在しており、かつサービス経済化等によってむしろ増加する傾向にある。特に文化・芸術活動の中心地である大都市圏では、こうした職種の労働市場が一定の規模で成立していると考えられる。若者の中でこのようなタイプの職種への志望が高まっているという指摘もある⁵⁾。こうした側面を、特殊労働市場要因と呼ぶことにしたい。フリーターと一括される現象を考察する際には、正規労働市場／非正規労働市場という二項対立図式が覆い隠しがちなこうした側面について、より考慮をはらう必要がある。

(b) 移行行動の欠如

以上では、「失敗」する結果になったとしても少なくとも移行行動に着手していたケースを検討してきた。しかしヒアリング対象の中には、当初属していた教育機関から他の組

5) 一例として 2003 年 3 月 2 日付日本経済新聞 17 面の特集記事「職人になりたがる若者たち」を参照。

組織への移行行動を何らとらないままフリーターになったケースが、合計で19名（全体の20%）、やはり5人に1人という比率で含まれている。このグループは、特に外的な阻害要因がなく本人の意思が欠如していたため移行行動をとらなかった（b-1）11名、何らかの外的・突発的な阻害要因のため移行行動をとれなかった（b-2）8名から成る。前者にはJIL 類型の「離学モラトリアム型」のサンプルが多く含まれる。このそれぞれは、もし移行行動をとっていたらおそらく進んでいたと考えられる進路によって、教育システム内部の移行と職業システムへの移行とに一応区別することができるが、その区別は相対的なものであり、サンプル数の点からも、両者を一括して考察することにする。

（b-1） 阻害要因のない移行行動の欠如

（b-1）のうち、どちらかといえば進学を考えながら行動に移さなかった（b-1-e）の4名はいずれも高卒であり、就職活動をしなかった（b-1-j）の7名には高卒と大卒が3名ずつと短大専攻科卒が1名含まれる。（b-1）全体の男女比はサンプル全体の比とほぼ同じである。

（b-1）の場合はむしろ進路志望が不明確であったという意識要因が移行行動をとらなかった最大の理由である。しかしそれを彼ら自身の言葉で言い換えるならば、「もっと考える時間がほしかった」ということ、あるいはさらに解釈を付け加えれば「安易な選択をしたくなかった」ということが、より実感に即した理由といえるだろう。

「専門学校に行こうかなと思って、迷ってた。専門学校は夢に近いじゃないですか。でも、その夢も見つかってなくて。専門学校入る子たちって、とりあえずっていうのが多いじゃないですか。そういうのは、すごく嫌で。むだな時間と、むだなお金がかかるから、「ああ、違うな」と思って。パンフレット見て、「ああ、美容師おもしろそう、じゃあ、美容師にしよう」とか、そんな簡単に決めちゃったら、つまんないなと思って。「もうちょっと時間があたらいいな」という感じですね。（中略）やっぱりそのときは、専門選びと同じで、何て言うのかな、「とりあえずやってみよう」ということができなくて、「考えたいな」という気持ちが強かった。」（No. 19f, 20歳, 高卒）

「専門学校に行きたかったっていうのはあるんですけど、何をしたいのか。専門学校ってそれを習いにいくところじゃないですか。何をしたいのか分からなかったんで。ほんとにしたいと思っ
てないと続かないと思ったし。」（No. 24f, 22歳, 高卒）

「卒業するあたりでもう服装関係をやるか、料理関係をやるか、あと、美術関係とか、そういうものがちょっとあったけど、服装関係がもう自分の中で大きかったから。ただ、ちょっと迷っている部分がある場面では学校に行きたくなかったんで、とりあえず時間をおこうと思って。も

しかしたら、もっとやりたいものが出てくるかもしれないと思ったんで。」(No. 13f, 19歳, 高卒)

「何やっていいかわからなくて、学校の就職指導はありましたけど、あんまり行かなかった。自分で将来を決めたことはないんです。何かこう、親の指針だけで…。何か自分で、今、就職しなさいと言われても、何を選び取っていいかわかんないんです。だから、何も自分じゃできなくて、家庭環境にもよるんでしょうけれど、結構甘やかされてたから、「いいよ、いいよ」で来ちゃったから、親も心配はしてるんですけど、今でも、でも、何か私がちょっとまだ心が定まらないっていうか、例えば、だれかの紹介で入ったとしますよね。それでまたいつものあれで、ちょっと嫌だからってやめちゃったら、その人の顔をつぶすことになっちゃって、そういうことがいろいろあって決心できないんです。かといって、自分で探しなさいとか言われても、自分で入れるところは……。」(No. 26f, 24歳, 大卒)

「教育実習とかに行ったときに、周りの同じ学生も行くんですけども、そういう人を見ているときに何か自分よりもその人たちのほうが適性があるなと観察してしまっ。ほんとうに子供側の身になって考えてくれる学生ばかりと出会ったので、そういう人になるべきだなと思って。自分は自分で何かやりたいとか、エゴを追求したいという気持ちのほうが自分の本心なんじゃないかなと思ったんですよ。だから、教員の採用試験とかも受けるのをやめようと。それで、自分はそういうエゴを追求したいなと思ったんですけども、やっぱり自分の適性というものをいろいろなことにチャレンジして見きわめたいと。」(No. 6m, 26歳, 大卒)

すなわち彼らの多くは移行の必要性を認識していないわけではなく、むしろ移行という課題を重く捉えており、慎重にそれを遂行したいと考えたゆえに、フリーターを選択していたことがうかがえる。

ここにもう1つ考慮すべき要因は、ある学校の卒業生の進路が特定のもの（たとえば進学）に特化していた場合、それに同調できない生徒は他の進路（たとえば就学）を選択しにくく、それを原因としてフリーターになる場合もあるということである。No. 27fの事例は、都内の私立女子高でほとんどが大学・短大に進学する高校の3年時、「大学へ行っても、多分お金を使ってむだなだけかなと思って」、在学中からフリーターをはっきりと予定して実際に卒業後フリーターになっている。もしこの高校で就職指導にも力を入れていれば、大学進学以外の選択として就職することもあり得たかもしれないが、実際にはこの高校では大学進学を拒否した場合、残された道はフリーターだけであった。

学校（特に高校）の進路指導要因が特定の方向にのみ強力に他の側面では限定されていたことについて、ヒアリング対象者が言及している部分もしばしばある。

「進路指導への希望と言えば、あまりに現実的だなと思うんです。「歌手になりたい」とかいう

夢も、「あ、それは、ちょっとなあ…」みたいな感じになるんですね。(中略) 先生側としては、自分のクラスの生徒はみんな、進学か就職か、してもらいたかった、きれいにみんな、やってもらいたかったみたいで。フリーターってなると……。」(No. 19f, 20歳, 高卒)

「(高校の進路指導について) すごいプレッシャー。しなきゃいけないみたいな。自分がしたいんじゃないくて、させられてるみたいな。」(No. 24f, 22歳, 高卒)

「学校の面談では、やっぱり信用できる先生だけにしか「音楽やりたい」って言ってないですね。それで、「ふざけんな」って言われたら、こっちが「ふざけんな」って感じですからね。「何で?」って。自分の知り合いとかにもプロデューサーの人とかがいたりして、ちゃんとやっている人もいるのに、「音楽やりたい」って言って、「ふざけんな、ちゃんと考えろ」って言われたら、ちゃんと考えた上での話だって。何をこの人は考えてるんだろうって。」(No. 40m, 19歳, 高卒)

以上をまとめるならば、(b-1) のグループが移行行動をとらなかった背景として重要であるのは、①意識要因(不明確) および②学校の進路指導要因(硬直的/不十分)ということになる。ただ、進路意識の不明確さの中身を詳細に検討したとき、移行行動をとって(a)のカテゴリーの中にも同様に志望が不明確なままとりあえず実行し移行に失敗した者がかなり多かったことと比較して、(b-1) に含まれる事例が特にきわだって意識形成に問題があるとはいえないことを、再度指摘しておきたい。

このことは、フリーターを経た現時点での進路展望にもうかがえる。すなわち、(b-1) の11名のうち、その後進路転換に成功して別の道を歩み始めた者が4名おり、他の7名も、漠然としている場合はあるがそれぞれに正社員や企業など何らかの志望を形成している。まったく無展望である事例は、典型的なパラサイト・シングルである No. 26f に限られる。このように、安直な移行行動に比べて、慎重な移行行動欠如は、むしろ自らにとっての課題として移行を強く意識しているがゆえにか、その後の意識の再構成に役立っていることが推察される。

(b-2) 外的阻害要因による移行行動の欠如

この (b-2) は、教育システム内での移行が外的要因によって阻害された (b-2-e) 7名、職業システムへの移行が阻害された (b-2-j) 1名から成る。8名のうち半数の4名は JIL 類型の「プライベート・トラブル型」と重複する。1名を除く7名(88%)は女性である。

(b-2-e) の7名のうち5名は、親の事業の倒産や親の病気などにより移行行動をとれなくなったケースであり、他の2名は異性関係で高校を中退した女性である。(b-2-j) の1名は、高3の就職活動をすべき時期に病気で入院し、「全然就職の説明会とかにも行け

なくて学校も休んじゃったから、とりあえず卒業すればいいやと」思って卒業したケースである。

この (b-2) の 8 名のうち、2 名 (93m, 72f) を除く 6 名は、専門学校に再入学したり特定の学校への入学を目指して実際に努力しているなど、フリーター後の志望がかなり明確である。ただ、志望が明確でない 2 名のうち 25 歳の男性である No. 93m は、フリーターになった時の阻害要因が現在までも影を落としており、そこから脱出できない状態にある。

「ほんとうに、もう、何も、やる気なかったです。でも、うつ状態的なものは、卒業した時からずっとあったし、今もあるし。(父の倒産によって) 進学できなかったから。(そういう事情があるのは)「自分だけじゃない」っていうのが、しばらくしてわかったことだけど。でも、納得できないっていうのが、すごく強くて。そのままずっと、今まできてるんで。でも、もうどうにもできないっていうのは、わかっているし。でもどこかでそれを原因にして、甘えているっていうのもあるし。今、精神科に行っているし、それで、どうしていいか、全くわからなくて。最近、行き始めたんですけど。今年。もう、いっぱいいいっぱいだったんで。」(No. 93m, 25 歳, 高卒)

しかし、他のケース (すべて女性) では、外的阻害要因に対して気持ちを切替え、新しい進路に臨むことができています。もともと家計的な阻害要因以外には意識等の問題が少ないケースであることから、こうした進路転換が実現しやすいと考えられる。

4. 本稿のまとめ

本稿では、フリーター析出の契機を<組織から組織への移行の失敗>という観点から整理し直し、各契機ごとに重要な諸要因を抽出してきた。また、それぞれの契機に応じて、フリーターになった後の進路展望がいかに変化したかについても検討を加えた。これら、各契機ごとの諸要因と影響をまとめたものが表 4 であり、さらにこの表に記された諸要因をグループ分けした結果が図 1 である。

表 4 に示したように、フリーターが析出する契機は大きく、選抜における非選抜、移行先への不適応、移行の長期化、移行行動の欠如の 4 つに分けられ、それぞれ教育システム内部で生じた場合と、教育システムと職業システムとの間で生じた場合から成る。そして図 1 に示したように、これらの契機において移行を阻んでいる要因もまた大きく 4 つに分けられ、それぞれ固有の社会システムの問題として把握することができる。すなわち、家計要因は家族システムの、意識要因は個々人のパーソナリティ・システムの、進路指導要

表4 フリーター析出の契機別、要因と影響

		教育システム内部の移行	職業システムへの移行
(a) 移行行動あり	(a-1) 移行先の選抜に非選抜	(a-1-e) ①家計要因 ②意識要因 (不明確) ③意識要因 (きわめて明確) ④進路指導要因 (不十分) ⑤非正規労働市場要因 * 影響: 進路展望明確	(a-1-j) ①正規労働市場要因 ②意識要因 (きわめて明確) * 影響: 進路展望明確
	(a-2) 移行先への不適応	(a-2-e) ①意識要因 (不明確) ②進路指導要因 (不十分) ③進路指導要因 (硬直的) ④教育内容要因 ⑤家計要因 ⑥非正規労働市場要因 * 影響: 進路展望不明確	(a-2-j) ①正規労働市場要因 ②意識要因 (不明確) ③進路指導要因 (硬直的) ④意識要因 (きわめて明確) * 影響: 進路展望明確
	(a-3) 移行継続中		(a-3-j) ①特殊労働市場要因 * 影響: 進路展望明確
(b) 移行行動なし	(b-1) 阻害要因のない移行行動の欠如	(b-1-e) ①意識要因 (不明確) ②進路指導要因 (硬直的) ③進路指導要因 (不十分) * 影響: 進路展望明確	(b-1-j) ①意識要因 (不明確) ②進路指導要因 (硬直的) ③進路指導要因 (不十分) * 影響: 進路展望明確
	(b-2) 外的阻害要因による移行行動の欠如	(b-2-e) ①家計要因 * 影響: 進路展望不明確	(b-2-j) ①家計要因 * 影響: 進路展望不明確

因と教育内容要因は教育システムの、正規／非正規／特殊労働市場要因は職業システムにおいて生起している要因である。フリーター問題は、こうした諸システムにおいて同時進行的に発生している諸変化の合成物として把握されるべきである。

また、この表4と図1にあげた諸要因からフリーターが析出される際の、要因間の典型的な相互関係を描いたものが図2である。この図は表4の中でも特に(a-2-e)について適格的であるが、他の契機についてもこの図の一部分を切り取る形で当てはめることができる。図2が表しているのは、硬直的ないし不十分な進路指導を一因とする不明確ないしきわめて明確な職業意識という【個人】の特性と、就職先企業(正規労働市場)ないし進学先教育機関の教育内容という【移行先組織】の特性の間との齟齬が主なプッシュ要因、他方で特殊労働市場や家計の必要性から参入する非正規労働市場という【フリーター市場】の特性が主なプル要因となって、フリーターを生み出していることである。

ただし図2で注意すべきは、個人の意識要因は学校の進路指導要因のみを原因としてい

図1 フリーター析出の諸要因のグループ分け

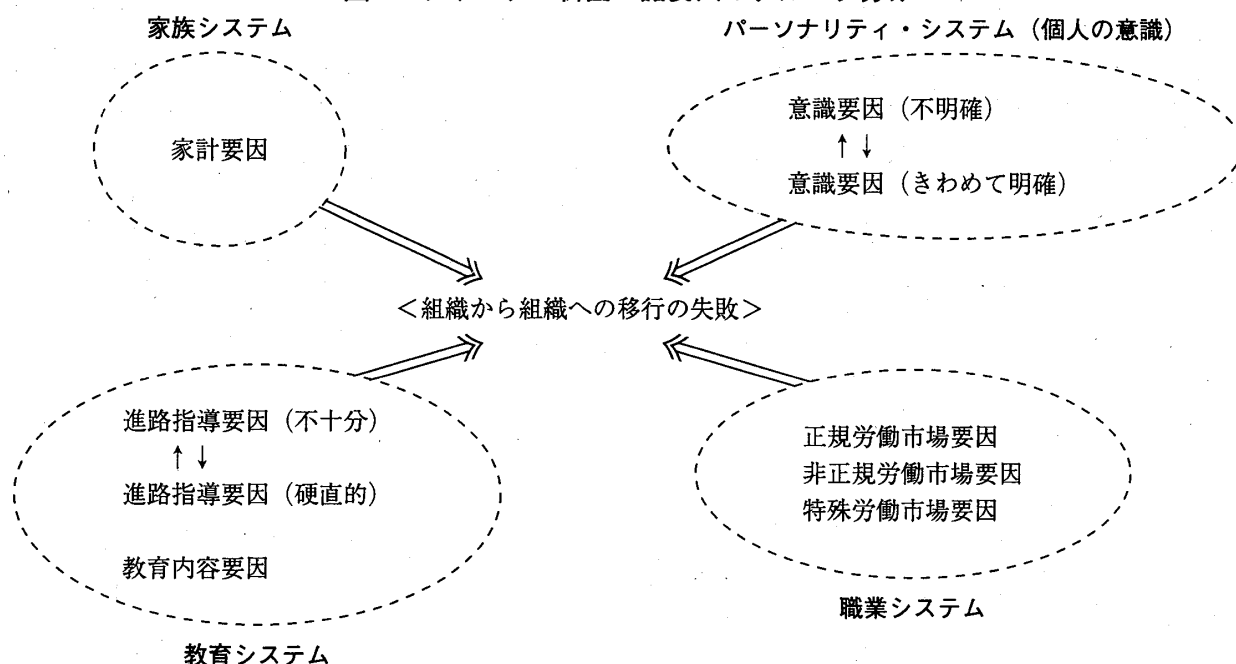
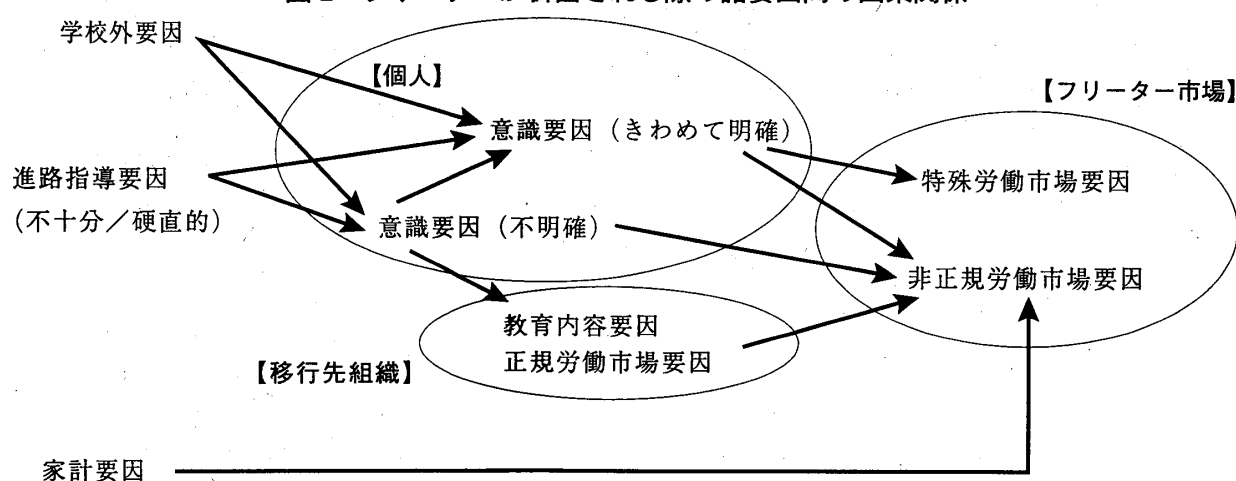


図2 フリーターが析出される際の諸要因間の因果関係



るわけではなく、むしろ学校外の社会・文化などによってすでに規定されている側面が大きいことである（荻谷他 2003）。すぐ後で述べるように、こうした進路意識形成の根元的困難さこそが現代社会のアポリアなのであり、それを学校の進路指導要因のみに帰することは問題の矮小化である。

以上に述べてきた本章の知見が、フリーターに関する従来の理解に対して新しく付け加える点として、以下の諸点があげられる。

まず第1に、確かにフリーター析出の要因の一部には若者の進路意識・職業意識に関する問題が含まれているが、フリーターが生み出されるのはそうした意識が「不明確」な場

合だけでなく、「きわめて（あるいは過度に）明確」な場合にもフリーターに結びつきやすい結果になっている。意識が「不明確」である場合には、個人としての選択ができず状況に流されたり行動ができなかったりすることになりがちであるが、対照的に意識が「きわめて明確」である場合にも、特定の選択や決定に固執する結果、現実的な環境の状況に適応できなくなることが多い。こうした若者たちに対して、「適切な」意識の醸成を求めることは言葉の上ではたやすい。実際に、近年のフリーター対策として必ずと言っていいほど指摘されるのは、高校等における適切な「勤労観・職業観の育成」である（たとえば小杉 2003, 172-175 頁）。しかし、実際には何が「適切」な意識であるのかについて明確な回答は誰も持ち得なくなっている。いまや意識は不明確であっても明確でありすぎても問題なのであり、これは現代日本の若者にとって進路意識を形成するということが構造的・根本的なアポリア（難題）となっているということに他ならないのである。こうしたアポリア化の背景には、短期的スパンでみれば後述するような職業システムの労働市場要因が存在しているが、より長期的には、社会変化の加速や価値・規範の多様化・個別化、社会に流通する情報量の飛躍的増大など、社会全体の複雑化・不透明化の進行と切り離すことができない。これらの現象が、教育システムと職業システムとの間のギャップを不可避的に増大させているということ、それがここでいうアポリアである。すなわち、職業システムの複雑化に対応するほどの複雑性を教育システムが内部に形成できておらず、おそらく今後も形成することは不可能であると予測される。こうした2つのシステム間の複雑性の落差が、その間を移動する個人にとっては、進路意識形成・進路選択の困難さとして現出しているのである。それゆえ「適切」な進路意識形成というスローガンは、政策的対応を提唱する上でのブラックホール以上の意味をもつものではない。そのようなスローガンとはまったく異なるマクロな次元で、システム間関係がアポリア化しているのである。

第2の示唆は、フリーターはこれまで考えられていた以上に、教育システム内部における移行の失敗の結果として生み出されている場合が多いことである。それはすなわち、フリーターは教育システム問題としての性格を色濃く帯びているということである。これまでもフリーター現象を教育政策や進路指導等との関係から捉える研究は存在してきたが、そこで主に問題視されてきたのは就職指導のあり方であり、進学指導のあり方や中等後教育の教育内容の問題点についてインテンシブに議論されることはほとんどなかったといえてよい。しかし実は、安易な進学先決定や入試の不合格、進学先への失望等がフリーターの原因となる場合は相当に多いということを、本章の分析結果は示唆している。この点に関してはさらに詳細な調査研究が必要であり、また政策的にフリーターの防止が取り組まれる場合には進学にまつわる諸問題への対処が重要なポイントとなる。

第3に、若者個々人の意識の問題と同様の難しさが、学校の行なう進路指導に関しても

観察される。いまや進路指導は特定の方向に強すぎてもいけないし、かといって進路指導が弱体化し不十分なものとなっている場合にも問題は大きい。生徒の学業成績を主な基準として、過去の例や実績を参考に特定の企業や学校に進路を振り分けるという従来のやり方が、不明確な／きわめて明確な意識を抱きがちな現在の生徒・学生に対してはすでに有効性を喪失していることは確かである。しかし、かといって進路指導を後退させ、生徒の「やりたいこと」にまかせた進路選択を放任するならば、生徒の不明確な／きわめて明確な意識は、外部からなんらの働きかけや刺激をも得られず、放置されるだけである。おそらく今後いっそう必要となってくる進路指導のあり方とは、生徒自身の意識や能力と、進路先との双方に関する情報提供量を増大させ、選択の妥当性を可能な限り高めることであると考えられる。しかしそのような柔軟かつ綿密な進路指導は、これまでのような制度化されルーティン化された進路指導とはまったく異なり、担当者にとってきわめて負荷の大きいものとなることは確実である。

第4に、フリーターの増加をもたらす要因として、職業システム側の労働市場要因はやはり重要である。ただし労働市場要因は単一ではなく、その中で正規労働市場（の縮小）要因は一部を占めるにすぎない。それ以外の労働市場要因として、非正規労働市場および特殊労働市場がいずれも拡大し、内容的にも時には若者にとって魅力の大きいものになっているということは、これまであまり指摘されてこなかったが、実際にはフリーター析出に対して大きく寄与していると考えられる。非正規労働市場については、その不安定さや正規労働市場と比べた時の処遇の低さ、スキルの低水準さなどが論じられることが多い。しかし、非正規労働市場に多い接客やサービスの仕事はそれ自体の「面白み」を十分にもっており、また職場によってはアルバイトでも基幹労働力として重要な仕事に就けたり、正規従業員に登用するルートが整備されている場合もある（小池他 2002）。また、一般の正規労働市場とも非正規労働市場とも一線を画す、個人の自律性の度合いの高い職種を主とする特殊労働市場も、サービス化や高付加価値化の趨勢の中で、魅力ある進路としての重要性を高めている。これら、非正規労働市場や特殊労働市場からの誘因に目を向けることが、フリーター現象を理解するためには不可欠であろう。

第5に、本稿ではフリーターへの契機として「移行行動」の有無に注目してきたが、移行行動とその後の進路展望の関係については、ある種逆説的な知見が得られた。すなわち、移行行動をとった上で移行先組織、中でも教育システムの組織から離脱した（a-2-e）には、フリーターとなった後に進路展望を再構築することが困難であった事例が多く見出されたのに対し、移行行動そのものをとらなかった（b-1）には、むしろフリーターになった後に何らかの進路への志向を形成している事例が多く含まれていたということである。これが示唆しているのは、安易な移行行動は、慎重な移行行動欠如よりもむしろ後に悪影

響を及ぼしかねないということである。その理由は、移行という課題の重要性を自覚している度合いに関して、後者は前者よりもむしろまさっているからであると考えられる。それゆえ、移行の成否は一定程度長いスパンで捉える必要がある。

ここで付言しておくべきは、本稿の分析ではフリーターになった後の進路展望の再構成に成功しているか否かという点から各事例を評価してきたが、主観的な進路展望とは別の客観的な労働市場構造上の問題として、いったんフリーターになった後に正規労働市場に復帰することは時間の経過とともにますます困難さを強めているのが現実であるということである（小杉編 2002, 30 頁図 1-8-1・1-8-2 を参照）。こうした点を考慮するならば、フリーターはやはり個人にとっても社会にとっても相当のリスクをはらんだ存在であり、そのリスクが個人および社会の各レベルでどのように対処されていくかは、今のところ開かれた課題として残されている。

また、本稿での分析は、あくまでアルバイト雑誌で募集した東京在住の自称「フリーター」97 名という限定的なサンプルを対象としたものであり、特にそれぞれの契機や要因、影響の量的・比重的側面に関しては、より大規模なデータによって追試される必要があることはいうまでもない。

以上、本稿では、トランジションという切り口からフリーターの実像に対して再検討を加え、フリーター析出の契機、各社会システムに内在する諸要因、その事後的影響について包括的な分析を行ってきた。その結果として見出されたのは、単に正規労働市場からはじき出された「モラトリアム」的存在としてのフリーターではない。アポリアとしての進路選択に苦しみつつ、教育システムの進路指導や教育内容の機能不全に愛想をつかし、職業システムに立ち現れつつある新しい労働市場に引き込まれていく、理解と共感が可能な存在としてのフリーターである。彼らは従来の日本のトランジション慣行が覆い隠していたアポリアに、最初に直面させられた不運な先駆者である。これからの日本社会にとっての課題は、彼らのアポリアを彼ら個々人の進路意識形成上の問題点として処理するのではなく、社会全体で対処すべき本質的な問題として引き受けることである。すなわち、教育システムと職業システムの間のギャップの不可避的増大というアポリアを直視し、教育システムの諸機能の限界を見据えた上で、なおかつ教育システムが個人や職業システムに対して何をなしえるかを探るという困難な課題への取り組みである。それは、「適切な」職業意識の形成が、たとえば学校教育への「職場体験学習」の導入や、「キャリア・カウンセラー」の養成と高校への派遣などの断片的な対症療法によって解決されるというような安易な想定とはまったく異なる。そうした取り組みにおいて、おそらく決定的な鍵となるのは、「レリバンス」という観点からの教育システムの再設計であると筆者は考えている。これについて詳述するためには別稿を要するが、ここでひとつだけ述べておきたいの

は、そうした再設計が、「教育」なるものに対する社会全体の認識そのもののドラスティックな転換を必要とするような類のものであり、それは同時に「社会」や「個人」、「働くこと」、「生きること」などの根底的な諸観念についても変革を迫るものとならざるをえないと考えられることである（本田 2003）。それゆえに、その実現にいたるまでには長く苦渋に満ちた道程が待ち受けているはずである。

<引用文献>

- 本田（沖津）由紀，1998，「実績関係の実態と変化」日本労働研究機構『新規高卒労働市場の変化と職業への移行の支援』調査研究報告書 No. 114.
- 本田由紀，2003，「これからの若者の働き方・暮らし方——新しい『常識』を作り上げるために——」『JIL@Work』vol. 13，2003年3月，20-23頁.
- 堀有喜衣，2002，「高校生とフリーター」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構.
- 乾彰夫，2002，「若者たちの労働市場のいま——「学校から仕事へ」の移行過程変容の性格と課題」竹内常一・高生研編『揺らぐ学校から仕事へ——労働市場の変容と10代』青木書店.
- 刈谷剛彦，粒来香，長須正明，稲田雅也，1997，「進路未決定の構造——高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37巻.
- 刈谷剛彦，濱中義隆，大島真夫，林未央，千葉勝吾，2003，「大都市圏高校生の進路意識と行動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻.
- 小池和男他，2002，『フリーターは日本の人材育成を損なうか』東京都産業労働局.
- 小杉礼子編，2002，『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構.
- 黒澤昌子・玄田有史，2001，「学校から職場へ——「七・五・三」転職の背景」『日本労働研究雑誌』No. 490.
- 耳塚寛明（研究代表），2000，『高卒無業者の教育社会学的研究』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 耳塚寛明，2001，「高卒無業者層の漸増」矢島正見・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界』学文社.
- 宮本みち子，2002，『若者が社会的弱者に転落する』洋泉社新書 y.
- 文部省，2000，『文部統計要覧 平成13年版』大蔵省印刷局.
- 中島史明，2002，「1990年代における高校の職業紹介機能の変容」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構.
- 日本労働研究機構，1998，『新規高卒労働市場の変化と職業への移行の支援』調査研究報告書 No. 114.
- 日本労働研究機構，2000a，『フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より——』調査研究報告書 No. 136.
- 日本労働研究機構，2000b，『進路決定をめぐる高校生の意識と行動——高卒「フリーター」増加の実態と背景——』調査研究報告書 No. 138.
- 日本労働研究機構，2001，『大都市の若者の就業行動と意識——広がるフリーター経験と共感——』調査研究報告書 No. 146.
- 日本労働研究機構，2002，『若者の就業行動に関するデータブック(1)——「就業構造基本調査」の再分析より——』
- OECD，1998，Employment Outlook，OECD.
- 下村英雄，2002，「フリーターの職業意識とその形成過程」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構.
- 粒来香，1997，「高卒無業者層の研究」『教育社会学研究』第61集.

<付属資料> フリーター 97 名のトランジション・プロセス

離学モラトリアム型	
1m	よく考えずに大学進学し1年後に退学、友人に誘われて上京、フリーター。その後服飾専学に入学して在学中。
2m	浪人してフリーター。大学にモグリつつ経営やパソコンの勉強。正社員、起業、家業を念頭。
3m	1 浪して再度受験に失敗しフリーター兼旅行。観光専学に入学して在学中。
4m	2 浪後センター試験をボイコット、半年引きこもり後フリーター。服飾専学に入学して在学中。
5m	就職先未決定（就職活動不熱心）のまま大卒してフリーター。途中半年正社員。20 代のうちに正社員を希望。
6m	大卒（いったん就職後 2 つめの大学に編入）後、教員への志望を変更しフリーター兼旅行。起業等を希望。
7m	浪人後フリーター兼ツーリング。コンピュータ専学に入学して在学中。
8m	2 浪後受験の意欲をなくしてフリーター。複数の専学や訓練校を経験。中医師希望。
9m	大卒時に公務員試験に失敗し簿記専門学校に1年通った後求職兼フリーター。失業者支援 NPO に加入、リサイクルショップ自営希望。
10m	高卒→英語専門学校1年→フリーター1年→大学・大学院→美容専門学校。
11f	ダンスの専門学校で旧友に再会し人間関係がこじれて1学期で退学、フリーター兼歌手志望。
12f	専門学校の受験に失敗してフリーター。模索中。
13f	私立高校卒業後フリーター（在学中から予定）。服飾専学に入学し在学中。
14f	ホテル専門学校の雰囲気合わず5ヶ月で中退してフリーター。模索中。
15f	短大受験に失敗してフリーター（高3の2月に入院）。模索中。
16f	写真専門学校への入学を取りやめて上京しフリーター。模索中。
17f	大学に1年通って失望し休学してフリーター。模索中。
18f	保育専門学校に1年半通ったがホステスのバイトに重点が移り中退しフリーター兼求職。25 までに正社員希望。
19f	高卒後上京しフリーター（在学中から予定）。民族系音楽・舞踊に関心。
20f	大学に興味がなくなり1年で中退してフリーター。模索中。
21f	保育専門学校の校風に合わず2ヶ月で中退してフリーター。美容専学に入学し在学中。
22f	高卒後予定していたワーキングホリデーの熱が冷めてフリーター。レコード会社就職希望。
23f	高卒直前に保育短大がいやになり内定を辞退してフリーター。模索中。
24f	高卒後進路未定でフリーター。オーストラリアに語学留学後、航空サービス専学に入学し在学中。
25f	短大専攻科から四大への編入試験に落ちてフリーター兼クラブイベント。数年後に正社員希望。
26f	大学時に就職活動をやる気がせず卒業後フリーター。結婚希望。
27f	私立高校卒業後フリーター（在学中から予定）。パソコン学習と就職を希望。
28f	2 次募集の高校に1年目からあまり行かず中退、こもってからフリーター。医療事務講習受講中。
29f	短大専攻科時に就職活動をあまりせず卒業後フリーター。正社員希望。
離職モラトリアム型	
30m	高卒後美容院に就職するが手荒れがひどく10ヶ月で辞めてフリーター。模索中。
31m	高卒後電気店に就職するが報酬の折りが合わず半年で辞めてフリーター。パソコン関係の仕事を希望。
32m	大卒後建材会社に就職するが面白くなく3ヶ月で辞めてフリーター。来年中には就職希望。
33m	大卒後派遣会社に就職するが将来が不安で1年半で辞めてアルバイトと語学学校。修了後求職中。
34f	高卒後スーパーに就職するが労働条件が悪く2年で辞めてフリーター。模索中。
35f	高卒後家具・携帯の2社に1年半・半年勤めるが辞めてアルバイト。ボーカル。25 までに就職希望。
36f	短大卒業後契約スチュワーデスを7ヶ月するが周囲のフォローがなく辞めてフリーター（正社員並み）。
37f	短大卒業後2社を10ヶ月・1年半勤め労働条件が悪く辞めてフリーター。スポーツ関係の仕事希望。
38f	高卒後ゴルフ場のウエイトレスを1年半勤め体調を崩して辞めてフリーター兼イラストの勉強。

芸能志向型

39m	高校を中退してバンド兼フリーター。
40m	高卒後バンド兼フリーター。美容専学に入学して在学中。
41m	大学中退後クラブ兼フリーター。
42m	高卒後職業訓練校を1日で退学してボーカルとダンスのレッスン兼フリーター。
43m	大学受験失敗後劇団兼フリーター。ネットワーク管理資格の学校に通学中。正社員希望。
44f	大学受験失敗後俳優養成所兼フリーター。
45f	高卒後1年間正社員後歌の練習兼フリーター。
46f	高卒後バンド兼フリーター。パソコン専学入学予定。
47f	演劇専門学校修了後演技の勉強兼フリーター。
48f	高卒後正社員の内定を辞退してバンドスタッフ兼フリーター。
49f	短大卒業後ボイストレーニング兼フリーター。派遣から事務職を希望。
50f	音大受験失敗後音楽レッスン兼フリーター。医療事務学校予定。
51f	高卒後通学社員を半年で辞めて音楽レッスン兼フリーター。
52f	短大卒業後声優養成所兼フリーター。求職中。
53f	高卒後2社の正社員後劇団レッスン兼フリーター。
54f	短大卒業後劇団の養成所兼フリーター。

職人・フリーランス志向型

55m	大卒後舞台衣装デザイン兼フリーター。
56m	高卒後正社員を4年したのち脚本執筆兼フリーター。
57f	ビジネス系専門学校を半年で中退後バーテン兼フリーター。
58f	大学受験失敗後予備校を2ヶ月で辞めて音楽関係の投稿兼フリーター。
59f	高卒後バーテン兼写真学校兼フリーター。
60f	ポリテクカレッジ中退後サッカー兼フリーター。
61f	各種学校修了後ネイルアート兼フリーター。サロンに内定。
62f	専門学校修了後イラスト兼フリーター。
63f	音楽短大を半年で中退後美容師の勉強兼フリーター。
64f	短大卒業後10ヶ月の正社員を経てシナリオ学校兼フリーター。
65f	専門学校修了後ケーキ関係のフリーター。

正規雇用志向型

66m	大卒時に公務員試験に失敗し卒業後再挑戦兼フリーター。
67m	大卒後就職活動兼フリーター。
68m	大卒時に公務員試験に失敗した後1年半の正社員を経て公務員試験準備兼フリーター。
69m	高卒後約4社の正社員を経て求職兼フリーター。
70m	専学卒業後7年の正社員を経てコンピューター独学兼求職兼フリーター。
71f	高卒時に就職試験に失敗した後求職兼フリーター。模索中。
72f	高卒（3年次に体をこわし就職活動できない）後求職兼フリーター。1年8ヶ月正社員経験あり。模索中。
73f	短大中退後派遣を経て求職兼フリーター兼バンドのHP運営。
74f	専学卒業後2年半の正社員を経てフリーター。販売正社員希望。
75f	短大卒業後正社員を経てスチュワーデス志望兼フリーター。
76f	大卒時に就職先が見つからず親戚の店の手伝い兼司会志望。
77f	高卒後6年間正社員を経て語学留学・派遣を経て劇団でアルバイト。
78f	専学修了後2社の正社員を経て派遣兼派遣コーディネーター志望。

期間限定型

79m	高卒時公務員試験に失敗、卒業後再度失敗、ゲーム専学への受験時期までフリーター。
-----	---

80m	高卒時浪人して再度失敗し美容専学の学費を貯めるため入学までフリーター。
81m	高卒時浪人するが服装専学に進路変更し学費を貯めるため入学までフリーター。
82m	大学中退してホテル専学に進路変更し学費を貯めるため入学までフリーター。
83m	大卒時に美容専学に進路変更し学費を貯めるため入学までフリーター。
84m	大卒後4年間の正社員を経て退職し大学院を受験するが失敗、再就職までフリーター。
85f	高卒時に専学の内定を経済的理由で辞退、学費を貯めようとフリーター。CAD 希望。
86f	高卒後ワーキングホリデーの資金を貯めるためフリーター。
87f	高卒後兄が大学を出て自分が服飾専学に入学するまで1年間フリーター。
88f	高卒時に浪人して学費のためフリーター、その後ホテル専学に進路変更。
89f	専学卒業後約半年の正社員を経てフリーター、ワーキングホリデー予定。
90f	修士卒時に博士への進学から就職に進路変更し5月に内定、入社までフリーター。
91f	高卒時に家庭の事情で看護大学進学を延期してフリーター兼受験準備。
プライベート・トラブル型	
92m	高卒後疲れて1年間休養した後フリーター、就職か進学を希望。
93m	高卒時に経済的事情で専学進学を断念してフリーター。模索中。
94f	美容専学を中退してフリーター。結婚希望。
95f	高校中退して同棲・フリーター。会計事務所で働きつついずれ正社員を希望。
96f	韓国の大学を家庭の事情で中退し帰国してフリーター、コンピュータ専学に入学し在学中。
97f	高校を異性トラブルで中退して定時制兼フリーター。専学、正社員を経てダイビング関係志望。